

あたたかな交流のはじまり

南国市青年市民会議・岩沼市訪問レポート その2

「いそがず、のんびり、ゆっくりにまちづくりを」と穏やかに語った小野市長。想像どおりの若々しさと魅力いっぱいの方でした。しかし、優しさの中にも強い執意が感じられ、一日のスケジュールをこなすだけでなく、市民とともにまちづくりを意欲的に



小野市長が岩沼市の現況を説明

行っているようであり、あらためて岩沼市は未来へ向けて前進していることを痛感しました。

その後、行政担当者との意見交換において岩沼市二次総合発展計画による市政の現況説明を受けました。バランスよく計画され、そして何より

も青年市民会議の提言書が基本理念となっていることには驚きました。それと同時に南国市の場合、私たちの提言書はどうなっていくのだろうかという期待と不安が頭をかすめたことでした。

農業について

南国市と岩沼市では自然の恵みの違いはあるが、強い農業を計画的に実施しています。現在、農業者の土地改

良事業負担金の過大などが問題となっており、岩沼市についてそういった内容を行政側より報告を受けました。

岩沼市は文字どおり昔は沼地でした。そこを明治時代より

国営、県営、団体営の農業農村整備事業で排水処理を中心とした土地改良事業を施し、農地として完成したもので、先人の熱意が今、実を結んでいます。今後、さらに事業の拡大が必要であることは

やむを得ないと思うのですが、先人の土地改良事業費を支払っている農家の今後の負担にも限界があります。青年の中にも十アール当たり三万七



懐かしい顔のそろった研究交流会

①農業施策

弱肉強食の時代であり弱い農家は負ける。負けないためにも努力しなければならない。例えば良質のものを作るとの品質改良など、日夜努力している人もいます。そういった人たちは満足するものを得ている。行政側は、一生懸命努力している人たちには力を入れるが、兼業農家など逃げ道のある人たちには力を入れない。えはならないなど強い姿勢である。

②土地利用の見直し

土地改良事業による借入金が残っている土地を市街化区域に編入することで農家の負担を少なくし、また、過密化した宅地を分散する。国際線の乗り入れで延長を計画中の仙台空港、交通の利便性を生かした工業誘致の現状、その工業用地および住宅地には水田面積の割を当てるといった土地利用計画があり、特に東部公共ゾーンと呼ばれる市民会館を核とする教育、文化、レクリエーション施設の充実ぶりには目を見張るものがありました。

まちづくり研究交流会では

ふるさと見聞録

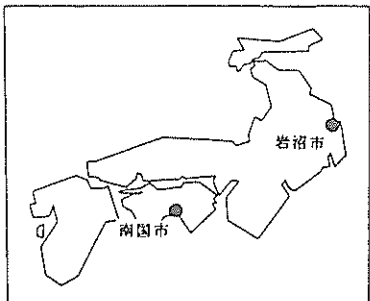
時間が短く感じられるほど意見交換がされました。農業、商業、文化、教育、環境の問題などどこでも同じ問題を持ち、悩み、そしてその解決

施策を暗中模索

しながら一生懸命何とかしようとする姿勢を目の当たりにして、同世代の者として心強いついでした。夜は竹駒神社参集殿での歓迎会、交流会

で言い尽くせなかったことなど話が一層盛り上がり、ふるさとの歌、そして鳴子が会場に鳴り響くころにはもう最高潮。いつまでもこの時が続けばと思っていました。そして最後まで付き合っていただいた市長さんに感謝の気持ちでいっぱいでした。

(3回シリーズ)



岩沼市

岩沼市は宮城県都の仙台市と隣接し、東北の空の玄関仙台空港を持つ交通の要衝地です。ともに県都に隣接した空港都市・田園産業都市として市勢が似ていることから昭和48年7月23日に姉妹都市の縁を結びました。



歓迎会で鳴子踊を披露

自立—かまひすぎ—

家庭教育学級専任講師
秦泉寺 千津

愛ちゃんは今もうすぐ四歳です。お母さんは愛ちゃんがかわいくてたまりません。服を着ようとすればボタンをとめてやり、先へ先へ気をつけてやっています。

ところが、保育園に入ると集団生活を送るようになったとき、愛ちゃんは何をするにも自分から進んで行動しようと思わず、不安そうなきがが目立ちました。お友だちが楽しそうに折り紙をしているとき、愛ちゃんは横からちっちゃら見ていただけで、自分でしてみようとほしませんでした。興味があつたわけではあり

ません。お母さんは心配になってきました。大きくなったら自分でやるだろうと考えていたのですが、自分でしようとする意欲や自分でできることの喜びを感じることが与えな

をかけてやり、かわいがつてやることは大切です。それは、子どもが「愛されている」と感じる事が深い安定感になるからです。

しかし、かわいいから何でもしてあげるといふ考え方はどうでしょうか。自分の手や体をどのように使うのか、工夫しながらやっていく時期に、お母さんが代わってやってしまうと手先がうまく使えないだけでなく、「自分ではできない」という劣等感を持ち、やる気をなくしてしまいます。

子どもに身につけさせたいことは、お母さんや周りの大人がやって見せ、子どもに自分の目や神経を使って経験をたくさんさせることが必要ではないでしょうか。

愛ちゃんはその後、折り紙に挑戦し、お母さんに教わりながら折りはじめました。一ヶ月ほど取り組んだある日、

「わあ、できた」愛ちゃんに笑顔がでました。きれいな折り目になっています。愛ちゃんはいくらも折りました。

子どもは「自分ひとりできるといふ」ようになる。自立へのあこがれと「困難を乗り越えたい」という願いをもちます。「いいよ、おかあさんがやってあげるから」「あなたには無理よ」など子どもがやろうと努力する力をそいでしまったり、日常のさまざまな配慮の大切さに気付いていないお母さんがいるのではないのでしょうか。

子どもは自分で何回も繰り返して困難を乗り越えたいとき、自信と満足感を持ち、さらに難しいことに挑戦しようと思えます。だから、困難を乗り越えるよう励まし、子どもの発達段階に応じた体験をさすことが大切ではないのでしょうか。

今月より、毎月一日号に十回シリーズで家庭教育学級より「子育て」についてお便りを出すことになりました。よろしくお願ひします。